ルカ福音書 14 章 1、7-14 節

14:1 安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。
14:7 イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。
14:8 「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、
14:9 あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかいて末席に着くことになる。
14:10 招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。
14:11 だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」
14:12 また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。
14:13 宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。
14:14 そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

年間第 22 主日 9 月第 1 週説教　2013.9.1

教えのことば・救いのことば

ルカ 14 章 1, 7-14 節

＜はじめに＞

イエスの言葉をあえて分ければ 2 種類になります。ひとつは教師の言葉、そしてもう一つは救世主の言葉です。

教師といっても学校の先生というより人生の師をイメージしてください、昔はなし風に村の長老の戒め、おばあちゃんの知恵袋のような感じでもよいか

と思います。もう一つの救世主の言葉とは、神のひとり子として救いを語るイエスの言葉です。
今年、礼拝で読み進めているルカ福音書の大挿入（9章51節～18章14節）の箇所はイエスの言葉が教師的なものか、救世主的なものなのかはっきりしないことが多いようにわたしには思えます。きょうのテキストもイエスの言葉をどっちの意味で聞くかによって受けとめ方が違ってきます。
＜きょうのテキスト＞
テキストは前半と後半に分かれます。前半は「上座につくな」後半では「お返しを期待するな」ということが書いてあります。これを教師の言葉として読むと、宴席でのテーブルマナーや人付き合いのコツになってしまいます。でもそれではイエスの言葉としてはあまりにも「浅い」ので、はなんだかんだと尾ひれをつけてイエスの真意を探るのですが、それではかえって迷路にはまり込むような気がします。そこで見方を変えてきょうのテキストを救い主イエスの言葉として読み替えて見ます。
＜終末と宴会＞
ルカ福音書に「宴会」はいろいろなシーンで描かれますが、いずれも何らかの意味で「神の国」の比喩になっています。そこで、このテキストを教え・戒めではなく、救いに関すること、イエスの言葉を救世主の言葉として読んでみると、テーブルマナーや人付き合いのコツはたとえ・比喩になります。つまり神の国の比喩となります。神の国で上席問題やお返し問題が議論されることはない、なにかにたとえているわけです。
救世主は神の国とその到来を告知し、この世の終わりを告げます。神の国、神の支配とは別の面からいえば世界の終わり＝終末です。
ユダヤ人は世界の終わり＝終末に希望を見出していました。しかし、世界の滅亡が希望であるという感覚は、正直にいってわたしには非常にわかりずらいところです。そこで、世界の終末はひとまずおいておいて、自分の終末に

重ねてこのテキストを読んでみたらどうでしょう。医師から余命三ヶ月と宣告される。仮に自分がそうだとして、そのような気分になってテキストをあらためて読んでみるのです。
宴会の席次なんて気にするでしょうか。お返しを期待して宴会など開くでしょうか。
14:11 だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。
14:14 そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。
イエスの言葉が教訓、処世訓の言葉ではなく、キリストの言葉、救い主の言葉としてこころに響いてくるのを感じませんか。
＜終末観＞
現代社会に生きる私たちはこの世界の終末を考えることに対して臆病になっています。それには確かに理由があります。終末はカルトと直結したイメージが強いのです。すこしきどった言い方をすればこうなります。
「天国での報いばかりに目を向けて、この世の現実との関わりを見失い、現実の人間の苦しみ・悲しみなどどうでもよくなって、宗教的な信念（実は妄信）だけの世界に陥る、という危険です。これこそ原理主義と言われる信仰姿勢の問題点です」（「福音のヒント」より）終末思想はこのような考えにおちいる危険をはらんでいます。
＜おわりに＞
ユダヤ人は世界の終わり＝終末に希望を見出していました。おなじようにキリストを信仰する異邦人も終末に希望を抱いくように教えられていました。歴史的にはルカが福音書を書いた１世紀の終わりのころは、信者のあいだで来臨の遅れが問題にされていたと研究者はいいます。イエスの直接の弟子の第一世代、使徒たちの宣教によってキリスト者になった第二世代、そして使徒の弟子たちに（イエスの孫弟子）よってキリストを知った第三世代、この

第三世代がルカ福音書の最初の読者です。彼ら第三世代にとってはキリスト来臨＝世界の終末がいつ来るのか、遅れているのはどうしてだという点が問題になっていた、それが「来臨の遅れ」です。ルカ福音書は当時の問題、来臨の遅れに関する視点から、また終末に関する視点で読んでみると混乱しているような記述もいくらかはすっきりとするように思えます。

注記）

きょうのテキストは参照記事がとても多いのも特徴です。読み比べると参考になります。時間のあるときにでも是非読んでみて下さい。

参照記事（前半だけ、後半は参照なし）

8-10 節　マルコ 12:38-39、ルカ 20:45-47

11 節　マタイ 23:6、23:12、18:4、ルカ 18:14